

作製時の問題点も多く通常は数mm以上の厚さとなる。このため、携帯用眼底カメラへの装着は決して容易でない。われわれは、薄手で、かつ、作製の比較的容易な本フィルターの開発と、その眼底脈管記録への応用を、各種真猿・原猿類で試みた。材料及び方法：撮影には、他の哺乳動物でも用いている携帯用眼底カメラ（コーワ製、RCⅡ型）を採用し、励起フィルター保持枠に装着を条件として、可能な限り薄型のフィルター（B5-20）を試作した。透過光は495 nm.までとなった。別に、透過フィルター保持、枠に、同様、装着・撮影可能な薄いフィルターD（透過光ピークは532 nm）同じくC（550 nm.）同じくE（581 nm.）を試作した。対象霊長類は、ニホンザル、ベニガオザル、タイワンザル、ミドリザル、リスザル、ヨザル、オオギャラゴである。何れも塩酸ケタミンでの全麻酔下、塩酸トロピカマイドによる散瞳処理を実施し撮影した。フィルムはコダック・エクタクロームASA 200、フルオレスセイン静脈投与での網膜血管造影である。成績：いずれのフィルターも一応の撮影像を得たが、一部は、やや厚きにすぎ、シャッターを切るのがやや困難な例もあった。B5-20XCが、相対的に良好な結果を見せたが、従来、標準的に用いてきたゲラチンフィルターに際立って良好な像とは云い得ない結果であった。考察：今回の試作は、数度の試みの積み重ねの結果の製品であるが、なお、透過光線量、同波形に改良すべき点を残した。フィルターの薄層化は、一面、そのもろさを見せた。今后、さらに検討を加え、携帯に十分耐え得る規格の決定を行ないたい。

方略学習に及ぼす情報試行の効果

小牧 純爾（金沢大・文）

先の研究（霊長類研究所年報，1976，vol.6，p. 49）では、NあるいはP刺激試行を導入した変型SRTが、ニホンザルの方略学習に対し、それぞれ促進と抑制という正反対の作用をもつことが明らかになった。これらの作用がNまたはP刺激試行に還元されるものであることを確認するため、先に3試行のブロックで導入したこれらの試行を1試行に低減し、方略学習への影響を見ることにした。

6頭のオスのニホンザルをN-1群とP-1群に分け、予備訓練ののち、20逆転からなる変型SRTを3ブロック、計60逆転にわたって与えた。これらの群には、通常のSRTと異なり、各逆転の開始前にNまたはP刺激試行を1試行与えた。逆転訓練は1日45～51試行、連続10正反応をもって逆転の学習基準とした。方略学習の進捗をみるため、SRT訓練ブロックの終了後に、20課題からなる2試行テスト課題を、計6シリーズ与えた。

N-1群中の1頭は学習が極めて遅く、60逆転を全うできなかった。残り5頭の遂行成績を分析し、先の研究で得た統制データと比較した所、次のことが明らかとなった。1) NおよびP刺激試行は、1試行ずつ与える場合でも、逆転訓練における選択を誘導する効果がある。ただし、その効果は3試行を重ねて与える場合にくらべると小さい。2) 両刺激試行は、1試行だけで与えても、方略学習に対し促進的または抑制的に作用する。ただし、これらの作用は、3試行を重ねて与える場合にくらべ、小さくなる。

以上の結果から、選択を行なう際の「注意のレベル」が、方略学習の規定因の一つであるとする想定を支持する証拠が得られた、と理解される。

ニホンザルを用いた血管内凝固症候群(DIC)の発症機構に関する基礎的研究

鈴木 宏治， 吉村 平
西岡 淳二， 橋本仙一郎（三重大）
江川 宏（関西医大）
中村 伸， 竹中 修
高橋 健治（京大・霊長研）

〔目的〕 昭和58年度に引き続き、DICの発症機構に関する研究の一環として、DIC惹起物質の一つであるendotoxin (ET) 投与時の生体反応、とくにETの血液凝固、線溶、キニン生成系および補体系因子への影響を検討し、DIC発現のメカニズムについて考察を加えた。

〔方法〕 実験には体重(bw)8～12kgのニホンザル3頭を用いた。ET (E.coli, Difco社) の2～5 mg/kg, bw, hrを8時間連続投与し、体温、脈拍数を観測しながら、経時的に採血を行い、以下の検査を行った。検査項目：血中ET量、各種血球数、凝固系因子(I, II, V, VII, VIII,